

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 90 1 2 3 4 5

特 0

417

吉田松陰先生遺著
福本椿水譯註

註譯
幽
囚
錄

惜春莊發行

始



情. 250
417



囚

錄



註譯「幽囚録」の執筆に付て

非常難局に對處せんとするには尋常一様の思案では出來るものではない、そこで熱血憂國の士が斷の一字で非常手段に訴へて行く、茲に難局打開があつて、破壊と創設とが併行して進む、これが更始一新である、然しこの非常行爲は往々にして一世の誤解を招き易い、而かもこの誤解が一國の士氣に關することが尠ないのである、松陰先生の下田米艦搭乗事件は確に國禁を犯しての非常手段であつた、然し其の眞意は宇内の大勢と諸外國の實情とを探知考究して國難對處の大計を樹立せんとされたやむにやまれぬ至誠憂國の熱情からであつた、其の根本精神を釋明著述されたものがこの幽囚録であつて、安政元年十月江戸獄から萩に移られ野山獄中で書かれたものである、其の序文の一節に

皇國四方に君臨し、天日の嗣永く天壤と窮りなきもの、安ぞ一たび衰へて復盛ならざることあらむや（椿水曰、この信念が國民にあれば）近年來魯西亞・米利堅（いまの精動などは問題ではない）として來り逼る、而して官吏苟且（一時の便宜のみ考へて）處分す、是豈永世變すること無らむや、皇天わが邦を眷み祐けたまはゞ、必ず英主哲辟（一時の便宜のみ考へて）を生み、この世態を一變して、古の盛に復す者あらむ、是の時に當つては萬國の情態形勢を察觀して之が規畫經緯を爲すに、徒に圖を按じ筆を弄して空論高議するものは固より此に與ること

得ず、吾微賤なりと雖も亦皇國の民なり(橋水曰、國民何れもこの覺悟で奉公の誠を致さねばなるまい)深く理勢の然る所以を知れば、義に於て身家を顧惜し、默然坐視して皇恩に報ずることを思はざるに忍びず。

と謂つて居られるのに其の由來は盡きて居る、實にこの幽囚録は字々赤誠、句々慷慨、章々熱情痛憤、真に國難坐視默念するに忍び得ざる切情を記述されたるものである。

而して松陰先生がこれを著述されたる動機といふものは、下田事件に連坐して同じく江戸傳馬獄に捕へられて居た佐久間象山が江都に於て先生と別るゝ時に、後日のために下田一擧の思想的根據を釋明記述し置けよと慫慂したるによるものであつて、松陰先生は成稿の上、翌二年外戚たる門人久保清太郎の江戸行に託し象山の姪北山安世に囑して、當時郷里松代藩醫居中の象山に送り届けられたものである、象山はこれに批評を加へて再び北山・久保を通じて松陰先生の手元にかへしたものである。向此の間幾多の經緯あるも茲には詳述を略す

この幽囚録は吉田庫三氏著松陰先生遺著を始め松陰全集卷一等既に公刊されたるもの多く殊に吾師故安藤紀一先生の訓註幽囚録なるものが存して居る、従つて今日それ以上訓註を試みるの必要はない、自分もこの安藤先生の訓註によつた所である、然し漢文力の衰へて居る現代青少年の間に於ては、これをも尙難解とする向がある、そこで自分は原文を可成現代的時文に譯し書き直した上に、あまり現代人に關心を引かない様な箇條を隨所に於て削除することにした、これは松陰先生に對し甚だ敬慕の念を

缺くことであつて残念至極と思つたが多少考へのあつたことであつて敢て寛恕を求めて置く、其の代り隨所に於て特に割註を施し又は原意を損せぬ程度に於て讀み流しに改め更に非常時日本の現狀に鑑みて私見をも加へ又は現時の國際情勢にもとづきて松陰先生の國際對策關係等をも照し合せ、讀者をして古を今に引きかへして松陰先生の至誠憂國の一念と其の遠大深謀の雄略とをなるべく深く把握せしめんと試みた所である、従つて本著は幽囚録の忠實なる訓註ではない、又原文そのまゝの註解でもない、然し現代的意譯とは謂ひ得ることが出來やう、そこでかりに譯註と名付けた次第である、若し夫れ進んでの研究家に於ては安藤先生の訓註幽囚録を心讀せられむこと望みてやまざる所である。

願くは一字一句心讀精思してよく味つて下さい、必ずや吾人の心底に強く何物か響くことであらう、殊に遠征の將兵諸彦は勿論現時の國難第一線上に活躍せらるゝ人士に於て讀むで頂けば此の上ない望外の幸である。

讀松陰先生幽囚錄

椿水

外夷頻々窺邊陲。國家安危正是時。墨國呈書求開港。甘言百端如禮餽。知己知敵經國要。用間制機兵家常。吾又欣慕非常業。攻防全謀丈夫行。君不見大瀛萬里如比隣。異鄉埋屍是我眞。如是而死於吾足。七生報國護帝宸。可憐崎陽與下田。一跌再跌空送年。燕雀何識鴻鵠志。一心忡々訴九天。

註譯 幽囚錄

福本椿水述

外寇外敵の來襲の患は古(代)よりこれあり、而して世々能將智能の將相あり、機に應じて掃蕩さうたう打ち拂ひし、大害を爲すに至らずかの元寇の役に於ける北條時宗の如きを思へ。近時に至り西洋の諸夷歐米諸國かはるかはる來りて通信通市通信貿易を求むるも、これ亦未だ大害を爲すこと能はざりき、嘉永六年六月、アメリカ合衆國の軍艦四隻相州浦賀に來り、國書國王の信書を幕府(徳川)に呈して切に要求する所あり、その大要もまた通信通市の二事にあり、故事幕府在來の法度に於てはに長崎を除く外には外國船の來り碇泊することを許さず、故に浦賀奉行幕府の役人説諭するに國法前の故事を指すを以てす、夷米使の使の曰く、我は吾國命を奉ずることを知るのみ、何ぞ日本の國法を知らむと謂ひて倨傲あなごる益々甚し米使ベルリの恫喝外交と共に其の無禮なる驕慢の態度憎むべき也。執政

幕府の政務に當^{くわ}る人即ち老中職^を過激^{くわ}せしめて事變を生ぜんことを慮り、浦賀奉行に命じて假に其の國書を受けしむ^{我が國力未だ不振なりしによるは云へ幕府要路にペルリ諾否の報を求むること甚だ急なり}其の不遜なる脅迫的威壓^{態度は米人の常なるか}遂に明年更に来ることを約せしめ、慰諭^{なぐさめ}して去らしむ。

是より先き數年、米人小船に乗りて蝦夷^{北海道}地方^北に來り、陸地に徘徊^{米人の横暴常}す^{にかくの如し}松

前侯^{福山の城主}之を捕へて長崎に檻送す^{快事々々、日本武人の氣概を示すに足る}是の如きこと凡そ二たび、浦賀に

來り、長崎に來り、漂民を我に送り還し、薪水を我に請ひ求むること又しばし

ばなり^{これ何れも老翁なる米國の我が國狀偵察にして現時のスパイ行動なり}其の我を問謀^{かんてよ}すること蓋一日に非ず、去年^{嘉永五年八月}

に及びて蘭夷^{和蘭人}合衆國使節來航のことを報ず^{和蘭人自國に利せんがために、米國人の來邦を内通せるも}

出來ぬも^{のなり}幕府深く之を秘して敢て中外に知さざりき^{かくの如き官僚的秘書外交では國民の承服する筈が}

是に至りて^{六年六月をさす}事倉卒^{俄に事が起}に出で衆情^{國民憤}甚だ騒^{さわ}し^{一國外交の要路にあるも}

餘話 (一) 米國の恫喝外交 ^{ベルリの侵略的來航とその恫喝外交とによつて日米兩國の國交關係は開かれた、爾}

來八十有五年、米國は機會ある毎に脅迫的恫喝と高慢なる侮辱的態度とを以て我國に臨んで來た、かの移民法案や如何、かの東洋門戸開放機會均等の提唱や如何、更にワシントン會議や九箇國條約は如何、近くは貿易通商上の諸壓迫は如何、實に我が國民に對する無禮忍び得ざるものがある、いままた

昭和十四年六月二十八日
ルーズベルト大統領は突然日米通商航海條約を一方的に廢棄通牒を發して來た、これ程國際信義を無視した不遜な無禮はあるまい、理由の如何に拘らずこれ程侮辱的横暴な仕打ちはない、過去二十八年間も日米兩國納得して無修正でやつて來た上に、今日兩國々交關係は先づ無風状態と謂つてもよい位である、それにこの暴舉に敢て出て來たことは到底日本人の常識では考へ得られない所である、然るに我が外務當局の聲明を見れば、當分の間、米國方の出方を注視すると共に傍觀的態度を執るの方針であると、而して一方米國側としては國際新情勢に基調を置く新たな條約を結ばんとするものであつて、必ずしも今日以上に日米關係を惡化激發することを欲しないと譎弄的な言辭を浴せて居る、吾が當局としてはあまりに悠然と構へた無關心振りではあるまいか、自重的注視的に名を籍りて國民の耳目を蔽ひ、官僚的秘書外交で因循姑息な解決を告げられてはたまつたものではない、今に於て既に國民の腹を固めておくの必要はあるまいか、殊に米國としては實に蟲のよい言ひ分である、餘りに日本をなめた仕打ちである、これで憤激しない國民は三等以下の劣勢國民であらう。

今回の大統領の暴舉に對しては米國人間に於てさへも次の様に言つて居る連中がある。

大統領は威嚇と脅し文句で戰爭の勃發を阻止し得ると考へて居るが、これほど危険な誤算はない、かゝる政策こそ

は米國が人命、財産、社會の一切を擧げて、一か八かの博奕に導くおそれが多分にある。

と、日本國民たるもの此の種の恫喝外交に縮み上つてたまるものではない、更に又今回の廢棄通牒は大統領一個の專斷であつて來るべき議會に於ては相當の紛擾を醸すことであらう、日本人も冷靜に注視してさう焦慮するにも及ぶまいと評論して居る一部米人もある、元來正直一途の日本國民はこれを自己の純情に照らし眞面目にそのまゝ受け容れずのが大國民たるの態度であるとなすの所論が、早くも一部有力識者の間に漸次擡頭しつゝあるかの感がある、然しそれはあまりにも無能無策、不見識不甲斐なき因循塗糊な彌縫策ではあるまいか、そのみならず吾人の最も憂懼悲憤に堪へないことは既にかうした米國の宣傳に魅せられて、大統領の專斷——米國民にも批難がある——經濟問題で政治問題ではない——改訂の用意は十二分にある……米國民の總意ではない、政治的意味は更でない、さすれば吾國民もさまで騒ぐにも及ぶまいと、はやくもかうした米國の宣傳戦に吾國民はうつかりやついけられて立つことさへも出來ない始末である、日英會談の眞最中に於ける米國のこの廢棄、從つて會談に於ける英國の硬化、これだけでも日本國民は餘程覺悟決心を固めなくてはなるまい。

願へば日米八十五年間の歴史は米國の侮辱的威嚇恫喝外交であり、我國はいつも萎縮追隨の他動的外交に終始して、只事勿れ主義に汲々と努めて來た脱帽外交であつた、これがためには秘密交渉のもとに國民の耳目を蔽ふて知らしむべからずでやつて來た、今この一節を見るに八十年前に於ける松陰先生の所論が昭代維新のこの國難時に於ても全く同一の情勢であるとはあまりにもなさない事ではあるまいか、東亞新建設の雄志に燃ゆる現代國民は先づ内に在つ

ては官僚的この種外交の舊弊打破と共に西海の兵火を顧みつゝ遠く眼を東に轉じて太平洋上の彼岸を睥睨すべき秋がいままさに來たのである。

(二) 米國のスパイ政策 世界大戰中列國が周密なる情報網を以て敵國をスパイしたことは世人の記憶に未だ新たな所である、獨逸人の情報は主として軍部關係機關によつて構成されてあつたがために開戦後間もなく敵國のために妨害を蒙つて眞の蒐集が思はしく行かなかつたことは確に敗戦の一原因であつた、之に反し英米側に於ては主として經濟關係機關に張られて居たがために、敵國の妨害を受くることなく開戦後はむしろ益々適確となつて非常な功を奏したと謂はれて居る、敵國に活動したスパイが血のにじみ出る様な活動を殘したことは既に映畫や小説や手記等によつて世に吹聴せられ、之等のスパイが本國に遞送した通信手段等は洵に至れり盡せりであつた。

現に米國の如き最近に於てはあらゆる在留米人を動員してあらゆる角度より日本の産業貿易の現勢内情を細密に調査せしめて居る軍事は余の關する限りでないインボイスの内容にまでも手を伸して偵知を進めて居る、如何なる政府の保護政策をも彼等は十分に探知して居る、而して本國への之等情報の結果がダンピング税の問題となり、高率關稅の賦課となり、商品や船舶の差別待遇となり、かくして貿易上の一大壓迫となつて遂に今日の條約廢棄となつて來た、開放的にして正直性な吾國民としては常に之等の諸點に細心の用意がなくてはなるまいと共に「外人を見たら悉くスパイと思へ」との俚言も敢て暴言として聞き捨つるわけには行かない。

この時徳川家慶薨じ、新將軍家定初めて立ち、水戸の老公徳川齊昭なりあきで老公これまを

起用して外寇を防ぐの議に參與せしむ、而るに小人比周小人輩互に結合してにして公の議論行はれず、公連に罷めむことを請ふ當時に於ける幕府狼狽の醜態と共に朝野驕然たるの状見るべきなり幕府大に武備を修め、先

づ大船の禁を除き寛永十五年將軍家光の時の造船禁止を解除す蘭人に命じて軍艦及汽船を造らしめ、浦賀與力

奉行に屬する役人 中島三郎助に命じて、洋書に依つて洋書の翻譯によつて大船を造らんとする先人の苦心を思ふと共に當時に於ける科學日本の貧弱を知るべきなり軍艦

を造らしめ、砲臺を品川に築き、大砲を櫻埒江戸小石川に鑄造し、伊豆の非山の代官江

川太郎左衛門坦菴高島秋帆門人を擢用し、高島四郎大夫當時の洋學權威者にして洋式兵備を主張せる先覺者の禁鋼を免じ、土

佐の漂民萬次郎初め近海に漁し、風のために漂流して米國に至り、彼の地に住むこと十數年、よく米國々情を偵知し去年歸國す皆之を江川の配下に屬せしめ、

特に米國申出の顛末を列侯群吏諸大名に廻附することに下して、其の復答米國への返事の方法を議す。

幕府も餘程困窮したものとみえる、征夷大將軍の威信面日既に地に墜つ

時に天下久しく治安に慣れ、朝野苟且一時の氣休めの論多し爲政者たるもの常に茲に思を致すべきである群議或は戰を言ひ或は和を言へども現時國際政局に於てもなほこの感がある身を抽でて責に任ずるもの有ることなし松陰先生

生のやむにやまれぬ至誠殉國の一念より出た所であつて、下田米糧搭乗事件も、要はこの責に自ら進んで任ぜんとされたわけである、滅私奉公の大義心もこゝであり、日本男子の本懐もこゝである某侯の如き奮然として

復書返事を持ちて米國に到らむと請へども幕府何等の應答指示を與へず。かくの如く幕府が眞先

きに恐怖萎縮して因循姑息既に米國に吞まれて居ては當時の屈辱外交も滅々致し方はなかつたわけである

餘話

(一) 小人比周 今や國民精神總動員運動は津々浦々までも行き互つて、一億一心舉國總親和が高唱され

て居る、然るに國民指導の重責にある政黨關係の相刺や如何、國難來の非常時局に直面し、何等の發言活動の見るべきものなく全く睡眠状態にあるのみならず、朝に黨利を争ひ夕に政勢を競ひ葛藤至らざるはなし、更に又現代社會各層を見るに大小の別こそあれ何れも相刺摩擦のなきものはなし、これを以て東亞新建設の大業に當らむとす、實に木によりて魚を求むと謂ふべきである、殊に我が國民性たるや一人成功すれば衆人これを扶けて大成せしむるの仁俠寛容なく、却つてこれを傷け倒して快哉となすの僻がある、願くは地下百尺の底に埋れて名聞を求めず利慾を念とせず、友を助け衆を扶けて其の大志を伸張せしめんとするの義人快傑を望むや切なるものがある。

(二) 身を抽て責に任ずる有るなし 松陰先生は曾て「尊皇々々天下豈一義卿松陰先生の名而己哉」と呼んで居られる、乃公出でずんば蒼生を如何せんとされたる雄渾絶大な氣魄精神が後人を壓する感がある、従つて松陰先生は「六十四國は悉く墨夷に相成候共防長二國計は確乎として特立し、天下恢復撻伐の基本と相成候様にと同志と商議仕候」と謂はれ又「尊皇攘夷、人々之を言ふ、吾藩未だ一人死を以て之を爲すものあらず、豈大耻にあらずや、死すれば則ち義名朽す、死せざれば再擧を謀るべし云々」とも謂つて居られる、更に又「國の爲に死を致す、禍敗を避けず、利鈍を顧みず、國家の士を養ふや二百餘年、一旦大事に遇ひ大節に臨み、一人として義に死するものなきは豈江家毛利氏の大耻なら

「や」と絶叫して居られる、この憂國の熱情、この殉國死の雄叫、この一大氣魄があれば東亞新建設の國難來もさまで騒ぐの要はあるまい、而してこの身を抽で、國家の重責を双肩に荷ひ敢然挺身して國難に殉する底の人物を要望するや又更に切なるものがある。

是の歳、ロシヤも亦長崎に來り、國書を呈して蝦夷の境界を議せむことを請

ふ日露の葛藤實に遠しといふべし、現幕吏長崎に西下し夷將ロシヤの大將と商議す、而るに委任專なら

ず幕吏の委任權限せまく、その一存に任せずとの意、能く其の議を決することなし、夷ロシヤ人再來を約して去る、明年安政元年

正月合衆國の艦船九隻浦賀港に亂入し、直に横濱に來りて前年要求せし所の返

答を求む、而るに我が國未だ軍艦、砲臺一も成るものなし若し交渉破裂して戰爭に及ばば、敗戦明なる所なり、嗚呼國際間の交渉は

武備の完成を以て第一義となす幕府は専ら事變の生ぜむことを懼れ嗚呼武備なき外交はかくま、寛大をもて夷人米國を

待遇せば、夷は却つて肆に不法の事を爲し弱みを見せればつき上、官兵幕府の兵之れしも禁ずる

能はず、人皆切齒す。米人の横暴かくの如くなりしか、國民の切齒扼腕するも當然なり

三月の半に及びて、米艦横濱を去りて下田に至り、市街にも山野にも徘徊あぐら

からざることなし弱者と見くびつた米人の心情態度、天人共に許すべからざる所、昔も今も變らぬその横暴振り思ふべきなり六月に至つて去る、事甚だ隱

秘にして世その故を識るものなし國民の耳目を蔽ふ秘密外交は斷じて許すべき或は謂ふ、通信通市

一に米人の求むる所の如くし、下田を以て互市場貿易開港場となし、米人に領事館を

置くことを縦たづせりとの説をなすものあり。

餘話

武備なき外交は砂上樓閣 外交は論議であり形式であり口舌である、巧に言ひ廻はしたものが勝利者とな

る、時には恫喝で成功を収むるものもある、然し國家の存亡、國民の生死を賭せんとする外交々涉はそんな輕薄なものであつてはならない、従つて武力の後援なき外交は砂上の樓閣であつて、到底成功の見込みはない、國と國との論争、これが最後の解決は力である、然しこの力は只に武力のみではない、天地に耻ざる正義の信念力に基く國民總和の推進力に基點を置かねばならない、此所に秘密外交の絶對的排撃がある、所謂松陰先生の「天下の事區々人巧にて成敗するものなし、殊に隱秘の事は却つて人を疑慮せしむ、正々堂々白中十字街を濶歩する」底の公明正大さがなくてはならない、一國諸政は國民と共にこの公正和協を以て百年の大計を樹立して行く、かくすることに於て國民の總力が發揚される、これが國力となり武力となる、この國民的合力が外交を押しして行く、泰山不動確乎不拔、如何なる國難をも乗り越し得るものである、今や我が國家はかねての覺悟通り英米佛蘇の包圍火中にある、この有史以來の大一危難を突破するには一億一心國民一致の總力體當りを以て之に應處するの外はない。

初め平象山 松陰先生の師 佐久間修理 は松代藩 真田 の臣なり、軍議官となつて藩軍に従ひ横濱に

屯す、下田の議 下田を互市場とすの論 定ると聞き、謂へらく、下田は我が邦の喜望峰 アフリカの喜望峰の如く東西航

海の要衝 な にして東西船舶必由 最も必要 の港たり、今夷に占據せられれば、その害言ふべ

からず、且大城江戸に在りて人口衆多、米穀布帛 衣食 皆これを海運に資れり、不

幸にして日米間に變あらば海路梗塞 ふさ して江戸第一に其の災禍を受けむ、伊豆

の州たる、天城山の險、その南北を隔絶し、而して下田はその最南端突出の處

にあり、一旦事起りて陸路より兵を出せば、砲隊は險に阻てられて以て行くべ

からず 陸戦はわれに有利なるも山險に阻てられて進む能はず 然して海路は則ち我に堅艦なし われより手も足も出せないとの意 他日たとひ堅

艦を造作することを得とも、夷に海陸の形勝 米國に地形上有利なる地 ありて、我は反つて

之を失ふこと良計に非ざるなり、夫れ善く事を制するものは常に其の利をして

我に在らしめ、其の患を彼に在らしむ 米國を制せんには彼を不利の地に置き、我を有利の地に置かざるべからずとなすものであつて、實に千古不易の兵理である、將來の太平洋上作

戦に於ても此所に深き 後日の謀計 思を致すべきであらう若し已むことを得ずして敵人に地を假さば、宜しく他日の計 後日の謀計

を爲して海陸兩方面より兵を進むることを得る處を擇ぶべし 此等所論の可否に付ては自づから議論もあるべし、然し當時に

於ける憂國志士の真劍 な なる態度見るべきである 竊に横濱の地勢を覽るに甚だこれに稱ふ、且つ夷船をして常に横

濱に在らしめば、江戸を去ること甚だ近ければ則ち人々膽を嘗め薪に坐するの

念 臥薪 自ら已むこと能はず 象山はさすがに一世の達識者である、人心の緊張結合を以て對外策の第一義となして居る 警衛守禦の方も亦嚴ならざ

るを得ず、且つ親しく彼の長ずる所を觀れば、以て速に我の智巧 智識 を進むべし、

これその利たる所以なり、今米艦下田に退けば則ち人心必ず弛びて寇 外敵といや 遠しと謂はむ、殊に知らず夷船迅疾にして横濱に在ると下田に退くと、其の江

戸腹心の憂 除き難 たるは則ち間髪を以てすること能はざることを知らず、横濱を

以て直に互市場となすの愈 よ りとするに如かざるなり。 憂國爲政者の思を致す所、まさに茲にありと言ふべし

餘話

對外策は精神的武裝 國家興隆の基は國民の精神的武裝にある、勿論人口の多きを望み又國富の無盡藏なるを望む、然し國家發展の基調たる國防にもあれ産業にもあれ、すべてに於て國防精神、産業精神と言つた國民精神力の旺盛熾烈如何による、物的完備はこの精神力の運営によつて始めて完全なる機能を發揮するものである、さすれ

ば國家の重責に身を抽で、當らむとする緊張不拔の日本精神、これが即ち精神的武裝である、國家はこの殉國大精神によつてすべてのものを解決することが出来る、いまこの一節を見るに松陰先生は對外國策の第一義を國民精神不斷の緊張に基點を求めて居られる、實に千古の金誠と謂ふべきであらう。

吾が師平象山、經術深粹にして、尤も心を時務に留む、十年前、藩侯執政松代藩主

眞田幸實の幕府老中たりしときたりしとき、外寇の議を上り、船匠砲工舟師技工造船砲等の技術員を海外より備

ひて、船を造り砲を鑄、水戦を操練し砲隊を習ふことを論ず、これ然せざれば

外夷を拒絶し、國威を震耀振ひかすするに足らず（と謂ふ）其の後遍く洋書を講究し

専ら砲學を修し、事に遇へば輒ち論說する所あり。毎度此の説を主張せるなりとの意

象山曰く、方今の急務は元戎砲隊の戦闘力にあり、又自ら復答返書を持ちて米國に到ら

むと欲すと、則ち曰く、微臣山象別に謀を伐つの策兵書漢子に上兵は謀を伐つとあり、外交戦に於て必

あり、安んぞ風船いづく。に乗り聖東わしんさう。に下ることを得むと。風船のりて太平洋を飛翔し米大陸を横斷してワシントンに至り外交工作を以てよく國難を打破せんとす、其の言や狂暴に似たりと雖當時の憂國志士にはこれ程の雄志氣概があつた、飛行機時代のいまの外交官と併せ考へて、感や果して如何

幕府蘭夷に命じて軍艦を致さしめると聞き、大いに喜びて曰く、徒に之を蘭夷に託するは未だ善を盡さず蘭夷に命じて唯軍艦を購入せしむるのみでは最善の方法でない宜しく俊才巧思の士數十名を撰

び、蘭舶に附けて海外に出し、それをして便宜事べんゐんじに従ひて艦を購はしむべし、是

の如くすれば則ち往返ゆきかへの間に海勢を識り操艦に熟し且つ萬國の情形事情を

知ることを得て、其の益たるや大ならむと、因りて竊に建白する所ありさすがに象山で

志は實にこれに基きて決せり。松陰先生が長崎及下田に於ける海外出遊壯舉の決心の程を明確にされたるものであつて、この幽囚録を執筆されたる所以もまたこゝにあつたわけである

癸丑ちうとらうし六月嘉永六年六月米艦の來りしとき、余松陰先生江戸に遊寓せしが、警米艦浦賀入を聞

き馳せて浦賀に至り、親しく米人の陸梁亂れ走の狀を察して憤激に堪へず米人の横暴

謂へらく、大懲創たいちやうさうを加ふるに非ざれば、則ち以て國威を震耀するに足ら

ざるなりと吾等の祖先は常にかくの如き愛國憤激を以て國難打破に當つて来た所である江戸に歸るに及びて同志と反復論辨す。

是より先き、余過あやまちありて籍を削らる嘉永四年十二月藩許を得ずして江戸を發し宮部鼎藏と共に東北地方而

の周遊視察を企てられ爲に士籍を削られ謹慎の身となられたること

一三

るに官別に恩旨あり。藩主は却つて内諭して松陰先生に十年間諸國遊學を許さる、先生いたくこれに感激せらる 余深く自ら感奮し謂へらく恩を報ゆるの日至れりと。松陰先生一生の殉國的活躍もこれを端的に言ふなればこの藩主の知遇に感激されたからであつた、主恩に感激し國恩に感謝しつゝ一身を君國に捧げて行く、これが即ち眞の殉國日本男子であらう、然るに現代人に最も缺けたるものは 頗る分を越ゆるの言を作り身分をも顧みず僭越の言を上るとの意 先づ將及私言九篇を著して竊に之を上り、尋で急務條議を上る、又夷人の向に不法の事多かりしを惡みて接夷私議を作る。

是の時幕府は夷書を諸藩に下して言路を聞き各藩に意見を求めたりとの意 余同志と議す、苟に二三の名侯名藩主心を協せ力を戮せ、正議を發し俗説を排(除)すること有らば、則ち天下の論定らむと天下の輿論を定め指導せんには敢て數の問題にあらずして眞の問題なり 屢々之を藩の政府長藩要路者に言へども、政府は時勢を觀望して天下の大事は一藩の能く救ふ所に非ずと謂ひ、吾黨の論を以て狂疎任暴疎略にして事に通せずと爲す先愛の士が敢て事を爲さんとするや必ず此の種の誹謗を蒙る、而して廟堂の人々は多く自重に名を繕りて因循姑息遂に其の機を失ふ、草莽の臣は其の言動狂疎に似たりと雖も、やむにやまれぬ至情至誠に發し然かも斷の一字を以て萬死國難に當る、爲政者の深く思を致すべき所なり 余象山に師事して深く其の持論に服し、事毎に決象山の説によつて決心を定む を取る、象山も亦よく余を視る偉人の心情互に相通ふものあり、而して松陰先生が自己の眞情を素直に告白して居られる所に、あの純情あの公正あ

の飾り氣なき素樸の性情がよく現はれて居る常に余を勵して曰く、士に過なきを貴ばずして過を改むるを貴しと爲す、善く過を改むるは固より貴し、善く過を償ふを尤も貴しと爲すこの言ほど端的に人間的の岐路である、而かも現代人に於てこの弊や多し、三省せざるべからず 國家多難の際能く爲し難きを爲し、能く立て難き功を立つるは、過を償ふの大なるものなりと云へり。國難來に當つてはこの立て難き非常の功を立つることこそまさに男子の本懐

象山軍艦を購ふの説あるに及びて、余が決意に期す象山が松陰先生の決意を期待するや多大なるものありしとの意 幕府に於て或はこの擧幕吏を海外に派遣し艦を購入する事 あらむ、自ら松陰先生請うて役其の事に従ふの意 に従ひ、萬國の形勢情實を察觀するも亦過を償ひ恩に報ゆるの一端なりと期せり、然るに象山の説遂に行はれず、九月十八日嘉永六年長崎行のこと 余江戸を去りて西のかた長崎に至る露艦搭乗海外出遊計畫であつてこれは失敗に終つた 事意の如くなることを得ず、十二月季すなはちに及び復江戸に歸る、明年安政元年 夷船の下田に在るや、余藩人澁木生澁木松太郎であつて金子重輔のこと と竊に夷船に駕して海外に航せむことを謀るこれが有名な下田米艦搭乗事件 事覺はれて捕へらる。

餘話

嗚呼人生感激にあり 松陰先生があれ程の大活躍を試みられた源泉力といふものも、要は藩主の知遇に感激されたことが大いに預つて力となつて居る。「狂夫之言」「愚論」「大義を論ず」等幾多の上書建白をなし、切實なる時事對策を論難されて居るのも、全く藩主の知遇感激によるものであつて、藩主もまた松陰先生の衷情を察知されて「松陰には今後も感ずる所があるなれば隨時上書するがよい、押へれば却つて狂夫となるべし」とさへ國老益田彈正に内命されて居る所である、安政六年二月高杉に與へられたる書中に「萬々一にも、近年の内、君公御遷世被遊候はゞ、吾輩の忠竭すべき所なし、小子、今公様への忠心不能止は抑故あり、小子幼年より深く御知遇を蒙り、往年は御前會議にも屢被召出、親しく德音を伏聽仕、一々肺肝に徹し候、其の後感慨不能已事有之、亡命仕候處、後にさる人より承り候處其の節御禮の事御君公、國の實を失ふたとの御意ありし由、一乳臭、國に何の損益あつて、かく難有被仰候事か、何共誠に忝く候へども、小生に於ては感激身に餘り、此の世に生ては居られ不申候、墨夷行(米國行)思立候處夫れも不遂、死もせず、剩へ昨年已來又々恩旨を蒙り候事ともあり、昨年より屹度志を立て、當御在國中には是非一死を遂げ、積る重罪の御申譯可仕と存候處又死にそこない、野山屋敷にて三度の食事衣服襟枕等事を缺き不申、最早御發駕も近く候へども死すべき折も無之、加之世間は俗論の眞實にて一事の快と稱すべきものなし云々」と謂つて居られる、松陰先生が感激の眞情を知ることが出来る、従つて松陰先生は曾つて楠氏一族湊川殉國を忍ばれて「生きて己を知る(知己)の主に逢ふ、國事、力支へ難し、嗟、臣、死なんのみ、死の外なすべきなし」と一詩を賦して居られる、此の感激死が松陰先生の全幅である、松門同志が多く殉國したのもこの松陰先生の大精神を汲みての感激殉國死である、この感激性が人間の最高峰であらねばならない、而して現代人果してこの感激性あるや否や、多く論ずるに堪へざる所である。

余の西遊せしとき象山亦その意を察し詩を作りて之を送る、余捕に就きしとき、幕吏其の行装旅装のを收む下田番所取調の時に行李を幕吏が取り上げたこと装中に其の詩あり、因りて併あはせて象山を捕へて江戸傳馬街獄に下す、余と金子生とも亦江戸に送られて傳馬街獄に下さる、三人吏に對して鞠あそせらる、九月十八日官三人の罪を裁さだめて曰く、意汝等の意圖はとの意は國の爲にすといふと雖も、實は重禁(國禁)を犯す、その罪恕ゆるすべからずとなし、因りて皆國に遣して禁錮せしむ象山は松代藩に、松陰先生と金子とは長州萩野山獄に送らる嗚呼余去年來謀りし所、上は國に忠ならず、下は身に名なく名聲を掲ぐる程の功績を立て得ずなりとの意辱はづしめられて囚奴となる、人皆之を笑ふ、士たるもの下才才能の拙なきことを以て斯の世に生る生まれ甲斐なしとの意悲しいかな。

餘話

自己反省即進境

此の一節の後段深く味ふべきである、天を怨まず人をとがめず、只自己の才なきを靜に省みて痛嘆して居られる、これ程人間の奥ゆかしい尊いものはあるまい、實に松陰先生ほど眞面目な求道者はなかつた、其の三十年の生涯を見ると幾度か事志と違ひ、蹉跌もあれば不慮の失敗もあつた、然し其の中に於て猛然奮起し

つゝ自ら強く凝視反省し、更により切實に思索熟慮を加へ、如何なる逆境難苦にあつても斷じて自ら棄てず、實踐に敗るれば更に反省してより高き實踐に生きんと努力された所である、この一筋なる求道的精神は憂國慨世の至情と渾然一體となつて感激殉國死へと進まれた所であつて、この反省の力によつて其の全生涯を國と道とのために捧げ盡された所である。

孫子(兵書)曰く、率然そつぜんは常山支那五嶽のの蛇善く兵を用ゆるものは譬へば串然の如しとあるに

至り、其の中を撃てば則ち首尾俱に至ると蛇の頭を打てば直に尾其の尾を撃てば則ち首

(日本)は、東北は蝦夷に起り、堰々委蛇うねりく西南のかた對馬・琉球に至り、長

さは千里に互りて廣さ(幅)百里に過ぎず地形を論じ是れ常山の蛇勢に非ざらむや、然

らば則ち外夷に對し首至り尾至ると豈其の術なからむや松陰先生は日本の地勢を常山の蛇に喩ふべしとされたるものであつて、兵學家としての識見蓋し畿内近畿は所謂六合天地四方の中心にして萬國の仰

ぎ望む所、皇京の基萬世易ることなしこれが松陰先生の信念である、故に吾嘗て之が策を爲

して曰く、京を去ること近くして地たる便なる者皇京附近の便は伏見に若くはなし、

宜しく大城を起して幕府茲には朝廷の御役所の義となし、以て皇京を衛るべきなり松陰先生は

てして山陽南海を制し、東に伊勢尾張あり、之に備ふるに船艦を以てして東海

陸奥を制し、北に若狭越前あり、之に備ふるに船艦を以てして山陰北海出羽を

制し、是に於て諸道を制するの本(基)立つ、諸道又備ふるに船艦を以てす、是

に於て諸夷を制する具張るこれが松陰先生の國內的對策であつて、あの鎮國時代に於て諸夷諸道より皇

京に朝して幕府に覲す朝も覲も人臣の君に見ゆること首至るも尾至るも唯意の欲する所、以て進みて

攻むべく、以て退きて守るべし日本の中央に皇京を置き大船巨船を以て海上權を制し、若し外敵來襲せば東西兩面

の爲に海を扼せらるれば海運之が爲に絶ゆるが若きに非ざるなり。

(一) 國防は海上權の制覇にあり 松陰先生は世の所謂劇的攘夷論者でもなければ徒なる頑迷鎖國論者でもない、尊皇國權論者であり而かも進取的開國遠航雄略論者であつた、只幕府遠勅の結果、大義名分論よりして尊皇攘夷倒幕復古といふ聖火を吹き上げられた處である、こゝに松陰先生の日本精神が千歳に光を放つて居る、今此の一節を見るに敵國の内狀を知悉するにあらざれば到底この急迫せる國難の對策樹立は出來ないとしてあの再度の國禁まで犯しての海外雄飛計畫となつた所である、従つて松陰先生は夙に大船巨船主義を堅持して皇國雄略の國是を樹てんと思念されて居た所である、又西洋陣法をも取り入れて歩騎砲工の軍備を整へ或は築城要壘の改良修築を施し以て夷國の戦法に應ぜんと主張されて居た所である、此等の所論も現時より見るなれば或は兒戲觀の如き思ひあるも、あの封建鎖國當時に於てこれ程思ひ切つた主張は實に晴天の霹靂であつて一世を震駭せしめた所であらう、而かも此の間松陰先生は日本古来の優點を活し採長補短に苦心して居られる所であつて現代人の如き盲目的翻譯注入ではなかつた、こゝにまた松陰魂が生々として居る。

所論はともあれ、要は維新開國當時に於ける愛國の志士が如何に眞剣に國難に對處し心魂を打ち込んでの苦心であつたかと言ふことを如實に感得すればよい、而して其の抱負の雄大、思謀の深遠、而かも其の實行に當つては熱と誠と斷の一字を以て悦んで國難に殉じていつたと云ふことを知ればよい、現代青年に最も望ましきものは此の三大文字の實現である。

斯様なわけで松陰先生の門下生にもこの方面の人材は出た、現に渡邊高藏翁唯一の生存者にして九十八歳の如きは維新當時造船技術を英國に學び歸朝後工部省に入り、後にはかの長崎三菱造船所の創建に當られた様な次第である、我國はいま忠勇なる無

敵艦隊を有して太平洋上に飛躍して居る、又世界有数の海運國となつて七百五十萬噸の船舶を抱擁せんとする海運界を思ふ時、實に感慨の深きものと共に松陰先生の一大識見只々驚服するの外はあるまい。

近世輿地地を論ずるもの、或は曰く、山東東に非ざれば以て天下を制すること

無しと、これ徒に平・源氏以還この衰世の跡を知りて、古昔神聖聖天雄略の由第を知

らざるものなり。此の一節深く考ふべきなり、松陰先生の主張は大體政策海外雄略である、これは日本の國精神である、これ

國勢を思へば、自から思古昔神聖常に雄略を存し給ひ、三韓朝鮮を驅使し蝦夷を開墾した

ま上代にこの雄略あり現代にこの雄略なし固より四夷海外を包括まりし八荒國の八方を併呑した

ま何の類あつて吾等祖宗に見えんとするや志ありき。現代人が事珍らしげに八紘一字の國是を高唱するは實におかしなもの是の時に方りては六合

の中央を卜見定して京皇を建て畿皇都を去る五百里以内をいふ、を定むるに非ざれば不可なり

此の一句閉却し衰世は則ち然らずこの一句最も其の志小に其の略微に、僅に六十州日本國內だを

定むるのみ、故に山東八洲、沃野千里にして天府天然のの國、是に若くものなしとお

もへり、噫、後世の人常に見聞に慣れて非常に駭おき率然の勢を審にせず、亦何ぞ

與に經營の略を講ずるに足らむや。松陰先生の一大識見、その雄略、その氣宇、その大志思ふべきなり、確に現代人は此の種の雄略大志が衰へて来た

築城の制大に變革あり、其の書荷蘭より傳はる、これにより鑿々精細として考

ふべし松陰先生は頭連的排外論者ではない、寧ろ外國の文物を求めんと吸々として居れる、然しこれは探長補短であつて日本精神はあくまで生かして行く、現代人の如く盲目的外國禮讀者ではなかつたこゝが大切ぢや然れども吾

謂へらく、國に制を異にすることあり、人に新意あるは固よりなり松陰先生は日本の姿を嚴然と見守つて居られる、そしてそこに外國のものを取り入れて日本獨創のものを苟に倭才巧思の人ありて諸國を周遊し名城

堅砦を歴觀し、又彼の國の築城家と謂ふ所の者と辯論講究して奥義を尋ね、然

して後に其の法により伏見の大城を起し以て諸道の模範と爲し、それをして漸

次改築せしめば即ち可なり松陰先生の變革は破壊にあらずして新建設のためである、世の革新家の考ふべき所なり然らずして徒に二百年前

の遺制殘されたを恃み、以て夫の彈丸雨集の衝に當らむことは亦危からざらむや。

大城の下宜しく兵學校を興し、諸道の士を教へあの封建時代に於て教育の普及を唱へ學校制度を主張されて居る學校中に操

演場を置き、砲銃步騎の法を習はし、方言科外國語科を立て、荷蘭及魯西亞・米利堅・

英吉利諸國の書を講ぜしむべし松陰先生のこの進歩的而かも徹底的態度、讀者も驚くの外なし砲銃步騎は吾國の古法に固よ

り用ゆべきものあり、更に荷蘭諸國の法(制)を求めて其の未だ備らざる所を補

ふべしこれが大切な所、松陰先生の精神はあくまで日本流である船艦の海國吾國の如く四面環海の國に於けるは之を獸に足あり鳥に翼あ

るに譬ふべし、幕府癸丑の變嘉永六年ベリ来航に懲りて大船の禁を除きしは急務を知ると

謂ふべし、然れども西洋の制未だ遽に得知りやすからず、洋書に依り之を制

すれば形は恰も似たりと雖も、施用は則ち違はむ書物によつてその形式論は解つても實際運管上の妙術は解らないと、かうした徹底的實際的實行論が松

陰先生の常論主眼であつた蘭夷に命じて之を海外に購はむとしても蘭夷は未だ速に報答せず、平象

山、船匠造船技師を海外に備ふの説あり又人を海外に遣はし便宜事に從ひて軍艦を購

はしむるの説あり之等の諸説は前に述ぶこの二説は並に當今の急務なり、然るに幕府未だ之を

實行せず、今先づ一俊才を海外に遣し、船を造り艦を賣るの處を廉知(明知)せ

しめ、然る後に前の二説を行はゞ、事を擧げて敗墜敗失すること無きに庶おからむ。

荷蘭の學(問)大いに世に行はる、然るにロシヤ・アメリカ・イギリスの書に至

りては未だ善く讀む者あるを聞かず、現今諸國の船舶交わが邦くにに來るに、わ

が邦人其の國の言語を詳にせずして可ならむや、且技藝の流義、器械の制、諸國各新法妙思あり、各國夫れ夫れ特長あり荷蘭人の譯文に就て其の概略を觀るべし、然れども何ぞ各その國書に就て之を求むるに如かむや、直接その原書に付て知るに如くはなし今宜しく俊才を各國に遣はして其の國の書を購ひ、其の學術を求め、因りて其の人を立て、わが學校の師員となすべし、又漂民のわが國に歸り、夷人の教化に投ずる者を求めて、之を學校中に置き、其の聞見知識する所を問ふは則ち益を廣むる方法なり、器械技藝年を逐ひて變革す、世の文化は停頓せずして日進月歩の進展をなすものである、これに順應して行はなければ到底新時代に副ふ所以でないとして居られる、松陰先生は飽迄積極進取の故に遠方遐陬遠方邊陲の地には往々舊式を執り、古法に泥みて頑鈍固陋なるものあり、之等は現代人より觀れば甚だ平凡なることなり、然しあの鎖國封建時代に於て從來の陋習を破り西歐文化を取り入れ而かもそこに日本流を育て上げんとして居られる所に所謂松陰先生の實學的態度が現はれて居る故に諸大名をして一萬石毎に才士一人を貢せしめ、海外に留學せしむること三五年、又巧思を出し新制を創むる者、現今の發明創案のことあれば、定員の外に之を貢せしめ、遍く其の傳を廣めしむるも亦益を廣むる方法なり、今の急務安ぞ此に過ぐる者あらむや。

餘話

眞劍なる松陰先生

松陰先生は忠君愛國の熱情よりして、あの潔白純眞の至誠一念を以て尊攘の大義を振

り翳して勇往邁進されたのであつて、世間一般に見るが如き尊攘論者でなかつたことは既に述べた通りである、先生は當時の志士間に於て最も多く唱へられて居た所謂鎖國的攘夷論者ではなかつた、寧ろ西洋文物をも日本流に取り入れ、の雄略的開國論者であつたのである、先生の持論は我國より推し開いて航海萬里遠略進取の國策を樹て、進むでは海外諸國を壓倒せんとする底の開國積極論者であつた、外夷の恫喝の威嚇に畏縮して餘儀なく諸港を開き通商互市に順應するといふが如き倫安忌戰の俗情による因循姑息の開港論者ではなかつたのである、此の點より觀れば松陰先生はまた國權者であつて、國威の振張を期せなければ到底外侮を禦ぐことは出来ない、これがためには今の憂ふべき國狀に鑑み、一旦外夷を排斥して嚴然たる吾國威を海外に示し、然る後諸外國と對等、否、彼等を凌駕する諸條約を締結して大に海外に雄飛せんとされたものである、これには先づ朝廷と幕府と公武一體の實を擧げ、三百諸侯は同心協力してこれに當らなければならぬと考へられた所である、然るに幕府は事毎に外夷の恫喝に退讓し、遂に朝廷の勅命さへも奉ぜずして專恣なる振舞をなし、剩へ勝手に條約までも締結するに至つたので、先生の憤慨は其の極に達し、これでは臣士の分として斷じて許すことは出来ないと大義名分の上から又國權維持の立場から遂に大聲疾呼して尊攘倒幕の大義を鼓吹された所である、當時に於ける松陰先生の覺悟決心といふものは

神州の積衰一朝一夕の故にあらず、しかのみならず近日夷虜猖獗して皇威を屈撓し、而かも征夷諸侯を制すること

能はず、茲に於て私心慨然として曰く、攘夷の事、責、吾輩にあり、己にして勅旨煥發……奉勅の責固より吾輩にあり……常に謂へらく吾れ同志と力を戮せ心を協せ、正義を村塾(松下)に唱へ、以て國脉を培養し天下を維持すべし、自ら信ずること此の如し

と謂つて尊皇の事も攘夷の事もすべて皆自己の責任なりと覺悟して積極的活動に乗じて居られる、この國事すべてを自己の責任なりと感念してあれほどの熱と力とを以て國難に對處せんとする國士、果して當代に幾人かある、東亞新建設を以て自らの責任なりと自覺せんものは深く此の一句を味つてもらいたいものである。
此等の論議を詳にせんとするものは松平右近の論議を參照せられむ

諸大名、京師に朝覲し幕府に觀するに皆船艦を用ゐて、海路よりすれば則ち將士海勢に習ひて船具に虚套きょたうなく、緩急くわんきゆうの場合、用ゐるを爲すに足らむ、今朝觀の日諸大名が朝廷に觀し幕府に參する時諸大名皆船艦を用ゐれば、則ち東海陸奥の船、半は常に伊勢尾張名古屋の海にあり、山陰北陸出羽の船は半常に若狭越前敦賀の海に在り、山陽南海西海の船は半常に攝津和泉大阪の海に在り、以て京師を護り幕府を衛り、一旦外征には則ち數十の軍艦檣げきに應じて立ちどころに艤裝し、其の便以てこれに

尙なほふ優よくるもの莫ならむ。現在の海軍鎮守府管轄地と併せ考ふれば實に感深きものあり

或る人は謂ふこれは松陰先生の自問自答東海東山の二道は専ら諸大名往來の利を仰げり東海東山道地方は諸大名參觀往來のために利益を以て地方民は生活をして居る、いまこれを廢止すれば由々敷社會問題を惹起すべしとなせるもの今諸大名皆海路よりせば、驛馬遞夫前驛の馬や人夫旅

舍市塵前屋や小商店一旦利を失ひ、群起して盜と爲らざれば則ち流亡して丐かきとならむ社會問題を起して遂には一大吾謂へらく船艦の備は必ず積むに歲月を以てす、固より一朝燒打ち事件ともなるべしとに具ふべきに非らずそれには相當の歲月を要するものなれば急激なる變革は與へない、要は漸進主義で行くべきである若し二道の民をして其の業を他に移さしめば現時の失業對策であり轉業問題である、社會問題の解決は漸進主義を可とし、これが最後則ち固より盜と爲り丐と爲るに至らじ、況んや船艦備はるといへども陸路行を絶つに非ざるをや。海路往來となれば陸路は自然に寂しくなるとは云へ陸路が絶えるといふわけではない、寧ろ海運整備のために國內の繁榮と共に地方的にも榮えて行くであらうとの意を含む

そも皇和萬邦協和を以て國是の邦たるや、大海中に位し四面環海、太平の國に位すしかして萬國之に拱むかふ萬國が吾國を取り巻き向つて居る、凡そ地の勢吾國に對する諸外國の地形情勢といふものは我に近きものは害災禍を爲すこと切實なりこの一段うかうか見てはならぬしかして遠きものに次ぐ、これ古今の通論なり、古

船艦未だ便ならず、海を恃みて險と爲せり。軍艦の未だ發達せざりし時代は海を危險視して四面環海の國は國防上大丈夫なりと思つて居た然るに後世船艦日に巧に航海日に廣く。然るに船艦は異常の發達をして大船巨船となり又航海術も進歩し従つて航海場面も廣くなつて來た古に恃みて險と爲せし所。海洋を今は反つて賊の衝。「要衝であつて來襲攻撃の目標となる」と此の一段を讀むもの誰か現時の各國海軍々備擴張を併せ思はざるものやある、而して海を制するもの即ち覇者となるとなる、火輪の舶汽船作るに及びて、其の制益々巧に、其の行くこと益々廣く、海外萬里直に比隣と爲る、是に於てか海を隔つるもの患を爲すこと急。現時に於ける太平洋國海軍擴張案を思へば松陰先生の識見たるや實に大にして陸を接するもの是に反す。

餘話

(一) 皇和 松陰先生は我が國家を表現するに「皇和」と謂つて居られる、松陰先生の國體觀念はこの二字の中に悉く包擁されて居る、讀者はこの皇和なる文字をうか／＼と見過してはならない。

元來個人に個性のあるが如く國家にも國性がある、従つて國性を知れば自然に其の國體は解つて來る、徳富蘇峰先生はその昭和國民讀本中に「日本國性の神髓は我が國體の大和に因みて、和の一字である、所謂聖徳太子憲法の劈頭第一の文字「以和爲貴」の和である、和の一字は、之を擴充すれば八紘一字の皇謨となり、天業恢弘の聖猷となり、萬里の波濤を拓開し、國家を富岳の安きに置くの大詔となる、凡そ三千年來、歷朝の經綸一としてこの和の一字に基かさるものは無い、和は決して柔弱ではない、和は所謂中和を致して、天地に位し、萬物育はるの和である、和は包容である、和は協同である、和は同化である、和は感化愛育である」と謂つて居られる、和の説明は遺憾なくこれで盡きて

居る、凡そ吾國三千年來の歴史も詮じつむれば一のこの和の字に歸著するものである、松陰先生は皇和の二文字を以て強く吾等に呼びかけて居られる、その精神を現代爲政者に深く認識して頂きたいものである。

(二) 松陰先生は「我に近きもの、害を爲すこと切實なり、而して遠きもの之に次ぐ、古今の通論なり」と看破されて居る、明治時代に於ける朝鮮問題や如何、大正時代に於ける滿洲張氏父子の問題や如何、明治・大正・昭和三代より尙現時に於ける日支葛藤問題や如何、更にその間に於ける蘇聯の鮮滿支を通ずる極東政策や如何、支那を中心とせる英國の權益問題や如何、米國の東洋門戶開放問題や如何、過去を顧みつゝ、數へ來れば如實に實現を物語つて居る松陰先生のこの主張を無關心に閑却視することは出來ない、實に感慨深く過去の歴史を振りかへりみつゝ將來の國策樹立と共に國民の一大覺醒を要するわけである、朝鮮は合邦となり滿洲は不可分一體となつた、然し支那問題の將來は未だ豫測を許さない、それに吾が國はいまや北には蘇聯と葛藤を生じ、西には英支の共同抗戦があり、東には遠く米國の重壓がある、而して此等の急迫せる國際情勢を誘導せるものは隣國支那であつて所謂「近きもの害を爲すや切實なり」の一句に盡きて居る、英米蘇佛を向ふにまはし一時に包圍敵陣を突破するか或は各個擊破によつてこの國難を乗り切るか、この三箇年來未曾有の國難打開も要は國民の覺悟決心一つである。

神州の西を漢土かんぞとなし、海中諸島南洋諸島及濠洲及び亞弗利加の喜望峰となす。以下松陰先生は前述の地勢

の近きものと海上制覇の外敵との關係に論及されたもの漢土は土地廣大民衆多し、それ其の海を隔て、近きものなり、

近ごろ支那に英夷の寇^{例の阿片戦争}あり、明裔の變^{明の國王の後裔といふ}ありと聞く、もし洋賊^{英國等の外夷}をして支那に蟠踞^{はんきよ}て居ることせしめば患害言ふに勝ふべからざる者あらむ^{支那に於ける英國の基盤を思ひ}

又現時の日支事變に思ひ到り更に英國中心の國際管理案の如きを聯想すれば、松陰先生の識見只々驚服するの外、然れども吾未

だ其の歸着を詳にせず、察せざるべからず^{察の字深く味ふべきなり、松陰先生は支那こそ日本の最も戒心}

となつ、且其の廣東の市場と諸島喜望峰とは皆萬國の要會^{各國人の會する要衝なりとの意、松陰先生}

を以て南進發展の基地となさんとして居られる、現時世間^{此の地方に勢力を伸して通商を交へる}たり、以て四方の新聞^{海外の狀勢をも探知すべしとの意}を

聞くことを得べし。

餘話

支那に於ける英國權益の概略

英國が支那に喰ひ入つたのは阿片戦争の結果である、南京條約によつて治外法權を暗黙裡に認めしめ、之を根城とし主として揚子江流域並に南支を中心とその勢力を扶植し、續いて機を見て北支方面にも手を伸して來た^{新據なわけは北支方面より英國を驅逐してこそ}而して南支に於ては佛國と角逐して之を制壓し、北支に於ては北邊の露・山東の獨をそれく巧妙なる外交手段によりてその南下を妨げ、以て中南支の絶對的地位を獲得したのである、更に現在では日支事變の渦中に投じて全面的に日本を抑壓せんとするのが彼の老獪なる授蔣行爲である、今英國在支權益の概略を摘記すれば

- (一) 治外法權——南京條約
- (二) 租借地——九龍地方一帶（威海衛は一九三〇年還付）
- (三) 租界——天津・廣東・上海共同・芝罘共同・鼓浪嶼共同・蕪湖共同（漢口・九江・鎮江・廈門は支那に回收せらる）
- (四) 開市場——外人の居住營業自由地、九十八都（各國共通）
- (五) 公使館特殊區域の行政權（各國共通）
- (六) 軍艦碇泊——一切の港に碇泊することを得（各國共通）
- (七) 軍隊駐屯——揚子江流域、公使館區域（各國共通）
- (八) 勢力範圍（即ち不割讓地）——西藏、揚子江流域諸省、舟山列島、雲南省一部
- (九) 最惠國條款——關稅特權、負擔免除、鐵道、電信等
- (十) 内河航行權——支那一切の内河航行（各國共通）
- (十一) 郵便行政に關する權益——官吏任用請求權、業務經營
- (十二) 電信電話行政に關する權益——大東・大北兩電信會社、大東社四線・大北社三線（海底電信）、無電業務
- (十三) 海關行政に關する權益——官吏任用請求權、關稅收入管理權
- (十四) 鹽務行政に關する權益——鹽稅收入管理と官吏任用請求
- (十五) 外債に關する權益——總額七億三千百萬弗、團匪賠償金、其の他不確實擔保借款多し

- (十六) 鐵道に關する權益——經營權を有するもの二、借款權を有するもの二〇
 - (十七) 鑛業に關する權益——英支合辦炭坑三、回收されたるもの四
 - (十八) 航運業に關するもの——列國中最大を保有
 - (十九) 銀行に關する——六種二十三店、勢力絶大
 - (二十) 投資機關特種會社——十四種——煙草、石油、紡績業、鐵工業等
- 僅か八十年間にこれ程の汲血搾取政策を實現して居る、その暴狀天人共に許すべからざると共に衰滅國家の國民ほど實に悲哀なものはない、國民のすべては一切の私利私念を抛擲して國家興隆を専念しなければならぬ所である。

神州の東。松陰先生はいま迄は隣邦支那との國交關係と南洋を中心とせる南進論とを述べて來られた、今度は海を隔て、東方アメリカとの關係に論及されて居る。を米利堅と爲し、東北をカムチャツカと爲しオコックと爲す、神州の以て深患大害を爲す所のものは話

聖東（首府の名を以て國名に代用されたるもの）なり魯西亞（近世日本の國難史は米露なり、日清・日露の兩役や如何、日滿・日支の兩事變や如何、更に最近に於ける米國の無禮極まる一方的條約破棄や如何、蘇聯の滿蒙國境や如何、思ふて茲に到れば八十年前既に）而してロシヤの國都は海外萬里極西北の地に在り、其の神州を謀る（露國より日本に手出しをする）に於ける勢甚だ便ならず（日露戰爭に於ける露國の敗因は確に茲にある、松陰先生の識見が當つて居る）然れども其の東邊は我と一水を隔つるのみ（太平洋問題を中心として對米國防なり米國の機戰的態度をも併せ考へて見ることがよい、松陰先生は八十年前既に今日あるを豫言警告して居れる）

且近頃火輪船にのりて、來りて國界を議し締交（通商條約）を求む、安んぞ之を遠しと謂ふことを得むや、其の事なくして今日に至れるは、其の地近しと雖も、荒寒不毛（寒くして草木さへも生ぜざること）にして兵寡く艦少きを以てなるのみ（これは主として露國側を云はれたるものか）近頃はカムチャツカ・オコックに漸次艦を備へ兵を置き、隱然（秘密に而かも盛に）として大鎮（鎮は屯營又は守備をなすもの）と爲れりと聞く、若しそれをして兵足り艦具らしめば（兵艦の用意十分）其の禍固より踵を旋さ（かかと）さらむや。（軍備充實すれば必ず來襲すべきに付我が國は一日も早く軍備を整へて其の武力の均等を計り以て來襲に備へなければならぬと警告されたるもの）

餘話

日米の經濟關係や如何 米國の傳統的恫喝外交に付ては既述した通りである、而かも其の無軌道振りに付ては到底吾人の常識的批判を許さない所である、一般世間では今回の一方的・抜打的・非友誼的・不遜無禮なる條約廢棄を以て政治的意味のものではない、東亞新事態に即應せんとする純經濟的のものであると如何にも大國民的襟度を示すかのような所論をなすものもある、然し東京日英會談の經過を見ると明に英米間に於ては支那權益保全問題に付て協議が行はれ一脈通ふものがある、さればこそあの英國の寢返りの逆襲非協調となつて會談は暗礁に乗り上げて來た、又最近に於ては米國の援蔭行爲たる銀五百萬元の買入れが傳へられて居る、あの利に敏である米國人が日米通商關係の現實さに思ひ到らないことはないであらう、従つて今回の條約廢棄に付ては米人自體に於ても左の様に言つて居る連中もある。

日本は南米所在の十二箇國の合計と殆んど同額だけをアメリカから毎年商品を買つて居る、世界中でアメリカから日本よりも餘計に物を買つてくれるものはイギリス・カナダの二國のみであつて、日本は世界中で第三番目のよい得意である、日本は支那がアメリカから買ふよりもずつと餘計に買つて居る、一九三七年の日本との貿易はアメリカに差引八千四百萬弗を持ち込んで居るのに對し支那との貿易は差引五千四百萬弗の金をアメリカから支那に持ち込んで居る、この利益な日本との貿易を犠牲にしてこの不利益な貿易關係にある支那のために日本と葛藤を起し得るものであらうか、その上、アメリカは生絲を日本から輸入することによつて年々九千萬弗を日本に支拂ふけれども、それを原料として造つた品物は年々五億八千弗となつて世界中に賣れて居る、そしてもし日本から生絲が來なくなれば二十萬人の失業者を出し五億弗の工場を遊ばさなければならぬ、それは丁度極東への投資額の七分の五に相當する、アメリカはかやうな貿易上の利益を犠牲にしてまでも戦争に加はることが出來るか、貿易は一國産業の血であつて結論は言はずして明である云々。

と所論の結末は自づと明である、然るに米國はあの不遜無禮なる態度を以て挑戦して來た、これに付てはいろいろの見方や理窟がある、東京日英會談に於て米國を袖にして日英が妥協することは米國の面目にもかゝり且支那經濟支配權を日英に於て自由にせらるゝ懼れありとしての焦躁であるとの見方をするものもある、或は國內諸政策の引きつまり打破のカムフラージであると謂ふものもある、或は來るべき選舉問題の人氣取りと見做す所論もある、之等の見解は吾等國民の關する所ではない、十人十色の理窟を列べるがよい、然し斯様な國際狀勢に於て斯様な無禮非信義國家を相手にするには吾國民としては須臾も右顧左眄してはならないと云ふことである、不動の國是をガツチリ把握し

て堅忍不拔の大精神を以て舉國一致これに對處すべしといふことである、これには國家として他國への依存外交は禁物であり外國との依存獨立は眞平御免である、自國を恃みて獨立獨歩大手を振ふて自由に國際場裡を押し進む底の國力充溢と國民の志氣とがなくてはならない、就けても日獨伊三國同盟論である、國民にこれだけの覺悟決心があるならば速結至極結構であらう、然し同盟たるの故を以て獨伊に依存してはならない、飽迄自主的立場に於て同盟を適切有効に働かすことを忘れてはならない、國家の安全は必ずしも同盟にあらずして寧ろ他國に依存して國運を維持して行かんとする程危険千萬なものはない、否自國を衰滅に導くものはこの外國依存の國民的惰落精神である。

濠斯多竦利の地は、松陰先生は支那南洋を論じ米露を警告し、今や又濠洲方面を論じて居られる神州の南に在り、其の地海を隔て、

我と甚しく遠からず、其の天度緯正中帶中帶温に在り、草木暢茂のび茂し、人民繁榮し

て外人の争ひ取る所と爲るべし。松陰先生は暗に外人の植民地政策を諷刺して居られる然るに英夷こゝに開墾して據る

こと僅に其の十ノ一に居る、苟まことに吾先づ之を得ば當に大利あるべし。英人の濠洲に據る未だ僅に十分ノ一に過ぎずして十分ノ九は残されて居る、早く吾國民はこの地に進出しその繁れる資源を活用しなければならぬと謂つて居られる、現時の日濠關係を思ふ時、吾等何の類せかある朝鮮は滿洲と相連りて神州の

西北に在り、これも亦海を隔て、近きものなり、而して朝鮮の如きは古代われ

に。臣。屬。す。然。る。に。今。は。則。ち。寢。く。倨。れ。り。最。も。其。の。風。教。を。詳。に。し。て。此の句味ふべき也、松陰先生の深謀遠慮を知るに
足。之。を。古。に。復。せ。さ。る。べ。か。ら。ず。

餘話

(一) 安政日米條約に對する松陰先生の所見

安政三年七月松陰先生は新入門生たる久坂玄瑞と國策樹立に

關し種々討論を交へて居られる、其の一節中に「山來英雄豪傑の大事業を起さんとするや常に萬世の謀計を樹つる、それには先づ志を大にし其の略を雄にし、時勢を察し、事機を審にし、先後緩急を見計つて、先づ國內を定めて人心の統一を計り而して後に國外に向つて謀を施す、いま徳川氏は米國と條約を結んだが、一度結んだ以上は我より之を拒絶してはいけない、絶すれば信義を失ふことになる、されば或る時機までは條約を守つてこれを巧に活用するに如くはない、それにはこの間に乘じて蝦夷を開墾し、琉球を收め、朝鮮を取り、滿洲を拉し、支那を壓し、南洋印度に臨み進取の勢を整ふべきである、その結果は延て退守の基となる云々」と謂つて居られる、これだけでも現代人は少し恥しくはあるまいか、あの當時にこの國策が敢行されて居たならば現代人は今少しく歐米人に比し優位を占めて居たことであらうと共に現代の様な苦勞をしなくてもすんだことではあるまいか、伊藤公が日韓合併を無事に終へて始めて歸朝された時に、先づ松陰神社の神靈に「松陰先生多年の御苦心御宿望であつた朝鮮問題をいま伊藤が解決して歸朝いたしましたから御安心下さい」と奉告されたといふこともまさに然るべしと謂ふべきである。

(二) 残念なことあの濠洲 松陰先生は濠洲に既に目を放つて日本の資源地として利用厚生に生かさんと念願されて居た、あの當時若し濠洲が日本の勢力圏内にあつたならば現在の日本はどんなものであらうか、羊毛問題の如きは更に

念頭に置く必要はない、又あの豊富なる資源がこの統制治下に於て如何に役立つたことであらうか、而かも一大消費市場として日本の血となり肉となつてくれることであらう、せめて明治二十年代に於ける濠洲日本移民だけでも残つて居てくれたならばと今更残念痛感の切なるものがある。

凡そ萬國の我が國を環繞くわんざうを取りまとするもの其の勢正に此の如しかくの如き諸外國の狀勢に對應すべく國防計畫を

樹立せよといふのが松陰先生の主張である

しかしして我茫然として手を拱こまきて其の中に立ち之を能く察するこ

となきは亦危からこの國難來、この危急存亡の秋、このまゝ茫然默視は許されない、斷然海外に航し諸外國の至情よりして遂に長崎露艦・下田米艦搭乗事件を敢行されたものであつて、身を君國に殉せんとするものは只斷の一字による夫れ歐羅巴の洲たる、吾を去ること甚だ

遠く、古時は我と相通ぜざりき、船艦の便を得るに至るに及びて、ポルトガル・

イスパニヤ・イギリス・フランスの如き、乃ちよく我(國)を朶だ頤いを頭を垂れ動かして物を呑まんとすること朶頤

我も亦以て患と爲す、近時火輪の舶、國として之なきはなし、遠きこと歐羅巴の如きすら猶比鄰のごとし、然りと雖も是れ特傳聞に得る所、文書の記する所、然りと爲すのみ、其の果して然るか否かは遂に未だ知るべからず、安んぞ

俊才を得て海外に遣はし、親しく其の形勢の沿革船路の通塞を察しむるに如かむや。

日升らざれば則ち辰かたせき升るか辰か何れにか動くものであつて決して一時も停止するものでないとの意、次の二句も亦同意、これを文化的に見れば進むか退くかであり、國運的に見れば盛になるか衰へるかであり、國防的に見れば喰ふか喰はれるかの問題であるとの留意なり月盈たざれば則ち虧かげ、國隆さかんならざれば則ち替かふ、故に善く國を保つ者は徒に其の有する所を失ふこと無きのみならず又其の無き所を増すことあり國家盛衰の天理にあり、爲政家の要諦は此の數語に盡く、心すべきもの也今急に武備を修めて艦略具り礮ぼ略足らば、則ち宜しく蝦夷を開墾して諸侯を封建ほうけんし諸大名に土地を分ちて統治せしむ、維新當時の北海道開拓の狀と併せ考へてみるべし間に乘じてカムチャツカ・オコツクを奪ひ當時成功して居たならば現時の樺球に諭して朝觀會同朝するを會と云ひ、諸侯同時に朝するを同といふ内諸侯國內の諸大名に比しからしめ現時この説の通りなり朝鮮を問責して人質を納れ、貢を奉ぐる日滿不可分のこと古の盛時神功皇后當時の如くの如くせしめ日韓合併後の現時を思へば松陰先生の譏見や只々敬服々々は滿洲の地を割き日滿不可分の南に臺灣・呂宋諸島を收めて臺灣は日清戦争の結果、吾領有となり、いまや呂宋方面は吾南進論の最中にある漸く進取の勢を示すべし松陰先生の南北進論想ふべき也、而かも其の氣宇の雄大なる、其の抱負の深遠なる、現時の日本國策と對照して現代人果して如何の感かある然る後、民を

愛し士を養ひ、慎みて邊圉へんきよを守らば、則ち善く國を保つと謂ふべし此の一句が大問題にある、而して國民の自覺も亦茲にある然らずして徒に群夷争聚外敵紛争の間の中に坐し手を搖すことな國民は偷安苟且して居てはならない、宜しく國民は憂國振作活躍的であらねば何事も出来るものではない而して國の替へざるものは其幾くかあらむや國家の衰ふるは當然也

餘話

(一) 後世の人少しは恥しくはないか 日清・日露の兩戰役は明治時代に於ける吾國民の苦戰奮闘史であつた、然しこれがために東洋一隅の島帝國は一躍して世界列強に伍するに至つた、日清戦争の結果として臺灣は領有となつたが、一面には三國干渉のため遼東還附の苦杯をなめた吾國民には未だ血涙の新なるものがある、臥薪嘗膽十年後の日露戦争は六千萬民の生死存亡の岐路であつた、然し天祐愈々厚くして日本は再躍して世界的に飛躍するの運命を開かるゝに至つた所である、その結果は樺太の南半を得て近くはオコツク・カムチャツカと接し、遠くは米大陸を望むことになつた、其の後日韓は合併せられ、關東州は租借地となつて日本の大陸政策の基地が築き上げられた、而して滿洲國の獨立と共に日滿一心一體不可分の盟邦が出来て今や吾皇威は支那四百餘州の山河に旭光を投じて居る滿蒙國境硝煙腥風吹き荒ぶとは云へ何れは近く御稜威に靡くことであらう、又廣東・海南島・新南群島の占據と共に近く呂宋南洋諸島を睥睨して南進基地をも築き上げられた、かく觀じ來ればこの八十年間に於ける日本國民の奮闘史に敬意を表すると共に松陰先生の此の雄大なる對外國策に對して自ら省みて少々耻入る所である、實に松陰先生こそ

吾國海外進展雄略の豫言者であると謂はねばなるまい。

(二) 民を愛し士を養ふ 松陰先生は豊公の朝鮮征伐に對し「豊公は稀世の英雄であり其の雄略は感服するの外はない、然しかれ豊公は徒らに武力のみを頼みて徳化を知らざりしためにあの征韓雄略も遂に有終の功を收むることが出来なかつた」と謂はれて居る、松陰先生は武力治安の實を擧ぐれば宜しく徳化を以て宣撫鎮定すべきなりとされて居る、即ち民を愛し士を養ふを以て治國の要諦なりとされて居る、夫れ民を愛するにあらざれば民の歸する所を知らずして安業樂居の靜謐なく、士を養ふにあらざれば武備全からずして外敵の屈辱を蒙る、いま吾國朝野協力、舉國一致、この理念を以て隣邦の宣撫に當らむか支那四億民心を得ること容易なるべく、かくして日滿支一體となり亞細亞の一大同盟を興し、以て徒らなる諸外國の窺ふ所を塞ぎ、共匪の來り亂るを絶ち、東亞百年の和平を築き上げべきである。

孫子、兵戦争のを論ずるに、専ら彼(敵狀)を知り己(自國の)を知るを以て要と爲し

松陰先生は山鹿流兵學師家である、從つて孫子は先生の得意の一つである、敵之を始むるに計を以てして曰く、味方双方の狀勢を具に知つてこそ始めて適切なる對策が樹立されるものである、敵之を始むるに計を以てして曰く、大計を樹てる主孰か道あるその上で彼我兩國の君主、何れが道義に厚いかを將孰か能ある彼我兩軍の大將、何れが能・不能なるやを知る天地孰か得たる天の時、地の利法令孰か行はる命令、何れが徹底し兵衆孰か強か軍隊何れが強きか士卒孰か練れる士卒の訓練何れがよいか賞罰孰か明なる功を賞し罪を罰するに此等の事案を彼我對稱考究し、

更に之を終ふるに間かんを以てして曰く、明君賢將の動きて人に勝ち功を成す

こと衆に出づる他人にまさる所以は、先づ敵狀をよく知ればなり。これは豈兵事のみではない、人世萬事悉くこの心得あるものは勝利者也

近來諸夷の船競ひて我が邦に來る、然るに之を先づ知るものなし、是徒に彼を知らざるのみならず、亦己をも知らざるの甚しき者なり、癸丑の歲、合衆國より彼理を遣はし、ロシヤより博嬉ボチヤレンを遣はして我が國に至らしめき、時に江都

江の人或は曰く、近世海外に三傑あり、而して彼理・博嬉その二に居るとこの兩人を世界三傑中の二人なりとなすが如きは餘りにも國民が海外知識に缺けて居るではないかと松陰先生は大笑されて居るあゝ海外のこと茫然として辨ずることなく、

適來り問ふ者あれば錯愕あやまり認めして來邦するもの皆傑物なりと謂ふ、慨嘆すべきかな悲むべきかな。

餘話

孫子は其の兵書に於て「兵者國之大事、死生之地、存亡之道、不可不察」と謂つて居る、即ち戦争と云ふものは容易に手出しの出来るものではない、先づこれには「道・天・地・將・法」の彼我の關係をよく偵知見計つて謀策を樹てる、その上で更に前述の「主・將・天地・法令・兵衆・士卒・賞罰」等の何れが優劣なるやも探知考究の

上勝利の見込みある時に於て始めて兵を進むべきであるとなして居る、松陰先生の下田米艦搭乗一件も要は此等の探知考究であつて、其の上にて當時の國難對策を樹立せんとされたものである、斯様なわけで松陰先生は「古語にも戦勝は易く、勝を守るは難しと云ふ如く、燕文部を取るの難きに非ず、燕を守るの難きなり、但し民心を得る者は善く守るを得なり然らずんば亦運而已矣、然れば大業を興さんとなれば、征伐の日にあらずして、昇平無事の日にあり、昇平無事の政、眞に民心を得るに足らば其の餘亦何ぞ多言せん、世の輕銳浮薄の徒、此の義を思はずして徒らに遠略に志すは吾甚だ懼るなり」と謂つて居られる所であつて吾人の最も味ふべき所である。

軍に間現時のスバイを用ゐるは猶ほ人に耳目あるが如し、耳なくば何を以てか聽かむ、目なくば何を以てか視む、軍に間を用ゐずば何ぞ獨り視聽せむ敵状の見聞は一切出来ぬなり、これでは戦争

は出来ぬ也。我固より之を用ゐ、彼敵も亦之を用ゆるは軍の常なり、故に善く戦ふ

者は我用ゐるの至らざるを憂ひて味方のスバイがしつかり活動さへすれば敵のスバイなどは直に看破出来る所であつて別に心配する程の事はない當今宜しく間を彼に用ゆべきなるに

其の間諜のわが國事を洩さむことを慮りて敢てなさず。いま日本は海外諸國にスバイを放つて大に活躍せしむべき秋なりとの意日本の間諜が遂に外國に通じて日本の實情を洩しては大變なりとしてスバイを用

ひないが、これは畢竟幕府に於て間諜を使ひこなすだけの人物が居らないからであるとの意

然し彼敵間を我に用ゐるときは、我宜しくその間を留めて反間はんかん敵のスバイを味方に

欺くことと爲すべきに、其のわが國情を窺はむことを懼れて爲さず、あゝ何ぞそれ

惑へるや。

我實なからむかわがすべての力が充溢して敵に乗ぜらるべき間隙なければ彼に百の間ありと雖も、亦吾如何せむ、却つ

て其の敵の心を攻め其の謀を阻むるに足らむ、我虚ならむか前の實彼一の間なしと雖

も、我安んぞ永く存せんや。松陰先生は國としてのすべての解決は國力の充溢にありとされて居る所をよく見るべし、而して先生が再度の海外出遊敢行も要はこの一節たる用間の二字に盡きて居る而かも身を

以てこの難關に當らむとされたる決心の程知るべき也

餘話

松陰先生は「孫子十三篇の終りである用間は劈頭の始計前述の大計に相應じて居るものであつて、孫子の本意は彼敵を知り己を知ることである、己を知ることが出来るは隨處に於て論じて居るが、彼を知るの秘訣はこの用間の外にはない、一たび間を用ひて始めて敵情を知ることが出来、大計が樹立される、古より明君賢將は皆これを用ゆ、然るに當今これを用ひず漠然として居るは甚だ遺憾なり」と謂つて居られる、豈松陰先生の當時のみならむや、現時の如き國際政局に在りては尙一層緊要なりとす、而かも果して國際用間に遺憾なきや否や。

通信通市

貿易

は古よりこれあり、固より國の秕政政治に非ず、但當今の勢當今に於ける日本

の國狀及國際つゞに於ては力めて其の説を破らざるを得ざる者あり外國の恫喝脅迫によつて通信貿易をなすが如き開國論は直に贊し得ざる也とされたるもの古の

國を建てし者は徒に退守を爲すのみならず又進攻することあり國家としては常に積極進取的でなければならぬとは松

陰先生の論也。而して國を越えて之を攻むれば海外に兵を進むれば財力疲弊して國用支へ難し海外遠く出征して戦へば軍費多

くして國內財政の疲弊を來たすものなりとされたるものであつて日支事變と照し考へてみよ。故に必ず糧を敵に因み、償を人に取る然るが故に占領地城内に於て出動部隊の賄を

なし又國內需用の物資を輸入する、更に償金を取つて國內財政の補給に當つる、これは是に於て通市の説あり斯様な兩國關係に於て始め

て兩國の物資輸出入が始まり貿易といふものが開始されるものであるとされたる。敵國の人悉く殺すべからず、降る

ものは之を納れ、服するものは之を用ひ降服者はこちらで利用し活動せしむる小なるものは侯とし大なる

ものは大とし降服者の身分に應じて地位を與へ、こちらに心服せしめ活用する、日支事變に於ける宣撫工作と併せ考ふべきなりそれをして我に奉貢致賦そして彼等課を命じて、一つには占領地の治安と財政に當て又自國の國內財政に資せしむるせしむ、是に於て通信の説あり斯様な人的交換が開かれるが故に神功

皇后三韓を征したまひて以還、列聖天子様の爲したまひし所通信史を按ずれば而ち

知るべし松陰先生はこの幽囚録の終りに附録として列聖の雄略史を添付して居られるも茲には紙數の關係上之を削略す今は則ち是に異なり此の一句大に味ふべきである、元來松陰先生は一國の

生命は第三國依存關係ではいけない、獨立獨歩で進取的でなければならぬ、國運の停止は退歩に等しと云つて居られる、従つて外

國の重壓による通信通市をなすが如きは眞の開國ではない、こちらから進取的に乗り出す所始めて貿易があると主張されて居る。外夷

悍然勢猛來り逼り赫然さかん暴威を作り、吾は則ち首を俛せ氣を屏け、通信通市

唯その外夷の求むる所のまゝにし敢て違ふこと無く、佞人の利口法儒者の利巧な辯説乃ち或

は之を以て列聖の義に附す斯様な不甲斐なき有様なるに却つてこれを以て歴代天皇様のなし給ふたことと結局は同じであるなどといふ、實に怪しからぬ事である是の如きも

のに就ては吾豈その邪説を縦すことを得むやあの純情高潔な松陰先生としてはか夫れ水の流るるは自ら流るゝなり、樹の立つは自ら立つなり、國の存するは自ら存するなり、

豈外に待つことあらむや此の一句最も深く味ふべきなり、國家の存立は自主獨立ならざるべからず、獨立不動の態勢を要し第三國依存關係は國を危ふするものとされて居た所であつて、現時の不可侵論や同盟論に

付き深く思を致すべきなり。外に待つことなければ豈外に制せらるゝことあらむや、外に制せらるゝ

ことなし故に能く外を制す。此の最後の一句實に千古の金言警聲なり

餘話

此の幽囚録譯註を試みた動機に付ては劈頭記述の通りである、如何にも松陰先生の大國策——朝鮮——滿洲——支那——南洋——印度——アフリカ——濠洲——更にロシアと米國との敵性——而かも日本の將來の大敵は米國也——と看破されて居るその積極的外征一大雄略が自分の心をいたく引き付けたからであつた、そしてこれを進むるには海國日

本は大船巨船主義で開國するの外はないと、更に第三國依存存立の危険なることを戒めて國家の興隆は「民を愛し士を養ふ」にありと謂つて、國民の總親和總努力に言及して居られる、結局これは國家の存立は自主獨往而して總親和による國力充溢の外はないと云ふことになる、いま獨蘇不可侵條約の報を得てその感や更に切なるものがある。かうした松陰先生の雄略的一大抱負識見が甚だしく感激の衝動を與へたので、遂にこれを現代的國策事情と照合して筆を進めた所である、願くは讀書諸君に於て一章一句一字、精思心讀せられ、以て現代的に更新思索せられむことを望むや切。

松陰先生研究資料椿水近著目錄

吉田松陰之殉國教育

蘇峰先生曰「松陰先生を中心として其の門下生は勿論、周邊の事實、事情、光景、雰圍氣等あらゆる角度より細密に資料を検討す、實に得難き好書にして余も脱帽するの外なし云々」
菊判總クロス一千餘頁の大冊
東京市神田錦町 誠文堂發行 定價 六圓

吉田松陰殉國詩歌集

蘇峰先生曰「松陰先生一代の詩歌を集めてあます所なし、其の入念と努力とには敬服するの外なし、訓註も要を得、殊に時々餘話として挿話を加ふ、これが全く畫龍點睛の妙を得、一讀慷慨の氣宇を養ふに足る云々」
菊判特製五百頁
東京市神田錦町 誠文堂發行 定價 三四五十錢

訓註 孫子評註

蘇峰先生曰「孫子の註者、儻指に違あらず、然れども松陰先生の評註を以て卓絶となす、先生讀書恒に一隻眼を具ふ、就中孫子に於て最も神解あり、今福本君之を發刊す、惟ふに先生の神解を會得する者亦其の人に在る耳」
菊判總クロス七百餘頁
東京市神田錦町 誠文堂發行 定價 四圓

久坂玄瑞傳

蘇峰先生曰「久坂は高杉と共に松門の雙璧にして松下村塾の總參謀たり、今松陰研究權威者たる福本君によつて其のすべてが網羅蒐録され更に餘す所なく、史家の唯一好資料書なり云々」
菊判總クロス七百餘頁
東京市神田錦町 誠文堂發行 定價 四圓

松下村塾をめぐりて

惜春山莊發行

定價 五十錢

松下村塾を中心とせる案内説明書にして村塾を訪はむとするもの、必讀書也。

吉田賢良詩稿

松陰先生養父吉田大助の詩稿にして松陰先生研究家の必讀を要するもの。

玉韞詩存

松陰先生叔父、玉木文之進の詩稿、玉木先生は松陰先生の師にして又乃木將軍幼時の師也、一讀其の高潔なる氣品に壓倒せらる。

照顔錄訓註

山口縣教育會發刊

定價 五十錢

松陰先生最後の垂訓書にして愛國の至情紙上に溢れ一讀懦夫を立たしむるものあり、非常時日本青年必讀の要あるもの。

坐獄日録訓註

山口縣教育會發刊

定價 三十錢

照顔錄の姉妹篇にして松陰先生の遺言書とも謂ふべきもの、殊に先生の八紘一字の聚國精神を知るに足る。

松陰先生交友錄

四六判四百頁
惜春山莊發刊

定價 三圓

松陰先生一代の交友關係と其の略傳とを記述せるものにして松陰先生研究者の好資料たるもの。

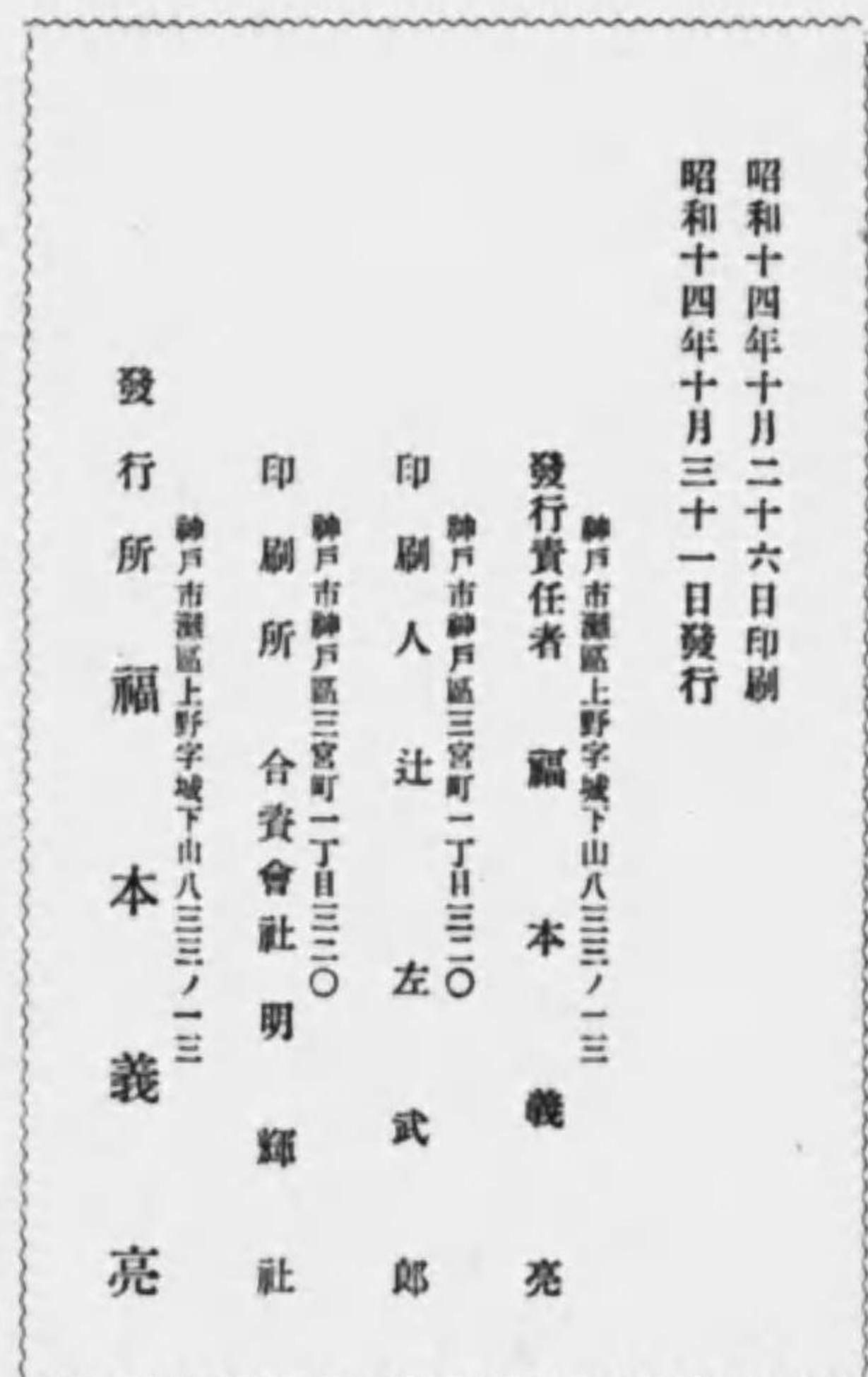
昭和十四年十月二十六日印刷
昭和十四年十月三十一日發行

發行責任者 福本 義亮

印刷人 辻 武郎

印刷所 合資會社 明輝社

發行所 福本 義亮



終

